

911.3
八
4

枕譜古今抄

拾遺十箇條
目之四

他諸在を抄巻之中

再校タヒスル十箇條序

蓮二二房

蓮二かくうけぬ今子拾遺十箇條の
むし祖翁の口誡をばかりて永く柳子庵の
秘稿とふとく祖翁の滅後二十年ありて
いそぐれ白馬持論をあらりて近く我らの
実評とてしあて遠く天下此実議を定規す
欺く者あれい程よ者も阿れいそぐ人おれ
抄り人いそぐ阿れと祖翁の標記めり

古今抄巻目

他諸在と抄巻之中

再校^{カヒスル}十箇條序^ヲ

蓮二之房



蓮二かくうけのりね今下拾遺十箇條の
むし祖翁の口誡をばかりて永く孤子庵の
秘稿とふとく祖翁の滅後二十年りて
いそぐれ白馬寺十論をあつりて近く我らの
家評とてしあへ遠く天下に家評を宣観す
欺く者あれは疑ふ者も何れもあつる人おれ
於る人いそぐりて祖翁の操新めり

古今抄巻五

此借の録明此法くるなる一—去れども
 貞古式之春秋之字此處を物くくく
 本辭を辭あるんけり十箇條に在傳の耳と
 かむしけり一箇十知の釈文ある一箇一文字此處
 ともあつて百世にけりこの録あるんせけぬ
 け一冊と同様今め凡例を加して終りけおの
 中巻ととあるり例に祀祭の口誡とおそれ例
 一先師の之也とあるんやんり人しけ序よ
 照あよよ

京保己 酉二月中浚

十箇條目錄 並凡例

古法可有取捨事

▲杜鰐 ▲浮見竹 ▲柳 ▲櫻 ▲掌 ▲螢 ▲杜若

▲芭蕉 ▲蝸牛 ▲鶴鴒 此十只六象物ノ數量十ナリ 古抄ニ此類ヲ五日訓ニ替日リ

異名ニ呼テハ之凡四凡免文レト今ノ作語ノ式目ニ座ニ只ト 定タリ古今ノ取捨トハ此謂ナリ 右ハ十只ノ名目ヲ奉テ 万物万象ノ凡例ト成セナリ 但シ柳櫻等掌螢ノ四只ハ 花鳥ノ段ニ釈文アリ 異名異射ノ差別ハ首巻ノ凡例ニアリ

去嫌可有取捨事

△父母△男女 世四只ハ人倫ノ凡例ナリ △主△誰△身 世四只ハ二句ツク去キナリ

△独△媒 世五只ハ人倫ノ噂ナリ人倫ト △僧△寺 世二只ハ定テ指合ヲ縁ルカラス

△二人倫 世非ス居ホニ非スト △親王皇女△天皇皇天女 世一在今式ニ指合ヲ縁ナリ

△帝御行△仙洞新院△鬼御 世十只ハ古式ニ色々ノ説アレ人倫ニハ

△二句ツク去キナリ佛行△若菜△郭公△松虫△水仙 世七只ハ會立思ノ各目ニテ決レテ

△水鷄△日月△尾上 世二有カラストナリ會意トハ

△二子ニ字ノ意ヲ會テ其各ヲ作ル 世二有カラストナリ會意トハ △雪△雨 世二只ハ古式ニ

△故ナリ字ヲ造レル六書ノ一名ナリ 世二有カラストナリ會意トハ △魚馬車△飯餅茶酒 世八只ハ

△阿比名類ナレハ 世二有カラストナリ會意トハ △日用ノ物ナレハ二座ニ 世二有カラストナリ會意トハ △松ノ子日△月ノ更科△花ノ野 世二有カラストナリ會意トハ

△二句ツク有キナリ 世二有カラストナリ會意トハ △鐘△鉄特圖△瓜木△妻 世二有カラストナリ會意トハ

△歎△木△篠△依△四雜△おまの扉の葛△水邊 世七只ハ古式ノ嫌物トナ △園御 世八只ハ

△山伏△山類夜分 世七只ハ古式ノ嫌物トナ △今式ニハ 世八只ハ

△△送△火△轉雷悚△眠△字△起△字△虫△石 世八只ハ

△夜分ト定レ在今式ニ夜分 世八只ハ △冠△鳥帽子△綿△木棉 世五只ハ古式ニ附句ヲ

△夕△立△雲△雨△笠△意△意 世五只ハ古式ニ附句ヲ

△嫌△レ△總△テ△ハ 世二只ハ古式ニモ異各ノ月ハ附レ △原生△師走 世二只ハ古式ニモ異各ノ月ハ附レ

△古今ノ違ナリ 世二只ハ古式ニモ異各ノ月ハ附レ △山降△風嵐 世四只ハ凡例ナリ總テ天象地形ヨリ能蘇ニ属

指合可有ニ分別事

○迎○而 世二只ハ年余波ノ例ナリ ○社○多○り○の○比○多○あり 世二只ハ年余波ノ例ナリ

○小と多りのて多り 世四只ハ古式ニ六本夏ト
Pレ氏今式ニ子細ナシ ○三字假名

○五字假名 世二只ハ古式ノ名目ナリ
今式ニ六等ノ細ナシ ○老 ○親子 世二只
ヲ古式

○鳴子 ○鯛 ○花鳥繪 ○花下櫻 世二只ハ古式ト今式トニ去嫌ノ透目
ヲ云ヘリ其下ニ考ヘ知キナリ

○楓下紅葉 世五品ハ古式ト今式トニ去嫌ノ透目
ヲ云ヘリ其下ニ考ヘ知キナリ

千句^ニ有^ル一物^ノ之^事

●鬼 ●虎 ●龍 ●女 世四只ハ連能ノ差別ナリ新式ノ
一座一旬ト云フ所ニ凡五十余名

アレ氏多ハ連能ノ用ニシテ能譜ニ不用ナリ去レ氏世四只ハ
佛軍ニ敵シテ能ト誰トノ差別ヲ云ヘリ今式ニ異能ノ数ヲ定ス

花鳥^ニ有^ル二物^ノ之^事

柳櫻 厚^ニ懸^ル管^ノ八^ノ象^ノ千^ノ鳥 世七只ハ古式ナリ一座
一旬ノ物ナレ氏花鳥ノ二只

ハ四花ハ甘ノ賞懸ニ效ヒテ一座三句
マ有手ナリ花鳥ノ名ハ代々ニ考ヘシ冬牡丹外椿外梅

紅梅 繡桃 梅櫻 紅葉山吹 郭公 世八只ハ花鳥ノ
中ニモ只一旬ナリ

二句ハ有ニキ物ノ凡例ナリ世段ノ詮用ハ二句有手異能ハ
只三句二句有ニキ同能ハ二下成セリ二句一意ノ用ヲ知キナリ

日用可^キ軒^{ニス}物^ノ之^事

○昔曉 ○庭垣 ○袖襟 ○湯汁 ○文仗 世十只ハ天象
地形ヨリ器賦

○植所 世十品ハ能心字ノ凡例ニシテ
面ヲ拜目テハ七モ八モ有ヘシ

○眠覚 ○起居 世六品ハ支能ノ能ナレト平話ノ
用多ケレハ折ヲ替テ四年モ有ヘシ

○耳目 ○手足 世六品ハ支能ノ能ナレト平話ノ
用多ケレハ折ヲ替テ四年モ有ヘシ

不可不審^ス於^ニ之^事

老福神親子此之品ハ不審ノ理屈ナリ早意編^事

電光^鳥鳥^雀橋此五品モ前ノ例ナリ古式ハ嫌^ハ又物ヲ今式ニ嫌^ハル

控^ノ不^審上^ハ青^月柳^花櫻^人此之品ハ式同ノ相遠ヲ各テ去嫌^ハ例々ナリ

洞^露洞^雨書^机櫻^鳥此四品モ相遠ナリ用所ハ其下ニ考^シ都^鳥

冷^字此ニ平ハ字又ノ婚ト字又ノ向遠ナリ此ニ口ヲ以テ連佛ノ用無用トテ損益トヲ知^キナリ

曾^テ不^ル及^バ論^ニ物^ノ之^事

雲^散椿^花蓮^入度此ニ平ハ佛^ノ字難^シ今式ニハ不用ヲ云^ヘリ

朽^木釈^文流^類説^白鳥^紙取^成此ニ平ハ古^ノ凡^ノ附^意附^ト

云^一取^域ト云^ル其^比ノ設^{ナリ}今^ノ作^諸ノ不^用
ナカラ^也等^ニ古^式ト今^式トノ各^別ヲ知^レトナリ

文字穿^毆金^之事

影^陰也^成場^庭此六品ハ古^ノ今^ノ常^談ナリ然^レモ

訓^レテ例^ノノ字^ニ鳥^滝詠^齡今式ニハ庭ヲニハト訓^シ場ヲハト

下^見ル^レ早^意ハ和^漢
ノ通^用ヲ知^シメ^シ為^ナリ

家^ノ秘^傳之^事

夫^レ秘^傳之^事也^ハ夫^レ乃^モ暮^傳授^ノ自^證ヲ難^セレ^リ

古今抄卷五

不可不審控之事

老福神親子 世之品ハ不審ノ理屈ナリ早意 稿妻 ハ古式ヲ捨テ今式ヲ取レトナリ

電光石火 鶴橋 龍尾 空電 世五品モ前ノ例ナリ古式ハ嫌ハ物ヲ今式ニ嫌ヘル

控ノ不審トハ 世之品ハ古式同ノ相違ヲ 青柳 芙蓉 櫻人 世之品ハ古式同ノ相違ヲ

洞露洞 雨書 机櫻 厚 世四品モ相違ナリ 都鳥 用所ハ其下ニ考シ

冷字 世ニハ字又ノ類ト字又ノ例遠ナリ世ニ口ヲ以テ連作ノ用無用トテテ損益トテ知キナリ

曾不及論物之事

雨散 椿之花 蓮入 度 世之品ハ佛舎ヲ難シラ今式ニハ不用ヲ云ヘリ

朽木 釈文 世之品ハ古式ノ 流類 説 世之品ハ古式ノ 白鬼 紙取 成 世之品ハ古式ノ

云イ取城ト云ル其比ノ設ナリ今ノ能讀ノ不用ナカラ世等ニ古式ト今式トノ各別ヲ知レトナリ

文字穿段金之事

影陰 世成 塙庭 世六品ハ古式ノ常談ナリ然レモ今式ニハ庭ヲハト訓レ塙ヲハト

訓レテ例ノ一字 鳥 滝 詠 齡 世四品ハ十條一却ノ意地ナリ詮用ハ其又ノ

下見ルレ早意ハ和漢ノ通用ヲ知シメシトナリ

家之秘傳之事

書之秘傳之事 世之品ハ佛舎ノ文法ニ傳授ノ自護ヲ難セシナリ

知識ヲ飾ントスル自讃ノ古ハ笑ニナリ然レニ段ノ詮用
ハ文字言語ノ用ニ非ス混同ニ中古ノ誹語ニ敵トシ
此十條ノ意地ヲ立ルニ言ハカ當ノ秘訓ト云イ一カ
兩斷ノ法語ト云ル文ノ虚実ヲ看破スル

古今抄序目終

拾遺十箇條

月之口

一理万通序

東花坊

今ノ不拾遺十箇條々自字の末比よりえ縁
の矣商ヤ々に湖南ノ字々ふられ武以ノ縁
下故翁の夜話と紳よきりしてかく十條の
極目と心きりに故翁を世よりゆりよれ
獅子庵の遺稿よそより五秘の一帖と云
きり也よそよむとあれは仙の世に
貞性の佛筆もきりて應安の新式より

此等三連能ノ用上返寫都寫朝聞此四子毛剛
 無用トヲ知之返入都寫朝聞此四子毛剛
 傳筆ニ新式ヲ采信タリ毀タリ早意ハ自己ノ傳授ヲ驥
 此右凡ノ抄者ノ筆法ナリ世故ニ今ノ能ハ諸人ノ毀ハ手
 置ル例ノ歴実○稱ハ自ハ自ハ○百ハ千ハ自ハ○喫ハ子ハ自
 此之自ハ歌道ノ傳授ニ復ニ他ハ流ハ亦ハ同ハ不用ト上
 傳筆ノ文法ニ之自ハ精ニ成ニ或ハ汝ハ或ハ淺ハ自己ノ
 知識ヲ飾トスル自讚ノ古ハ同ハ采ハ元ハナリ然レ世ハ設ハ詮ハ用
 此十條ノ意地ヲ之ハ二ハ三ハ口ハ力ハ者ハ由ハ秘ハ訓ハト云ハ一ハ刀
 兩斷ノ法ハ世ハト云ハ凡ハ文ノ歴実ヲ看ハ破ハスハ

古今新序目終

拾遺十箇條

月之心

一理万通序

東菴始

今予拾遺十箇條之自享味此之文祿
 の癸酉十二月に湖南の心予不武以思
 了故為の夜話と神と云一了十條の
 樞目と云之に故おもに世の中を在る
 狐子庵の遺稿と云之五秘の帖と云
 者也。と云之にこれ世に在る
 反性の傳筆も在る應守の新式も

拾遺十箇條

○ 正法可有取捨事

中在謙讓の法と連音に於て物に從ふ
 二と爲すに於て物に從ふに於て物に從ふ
 三と爲すに於て物に從ふに於て物に從ふ
 四と爲すに於て物に從ふに於て物に從ふ
 五と爲すに於て物に從ふに於て物に從ふ
 六と爲すに於て物に從ふに於て物に從ふ
 七と爲すに於て物に從ふに於て物に從ふ
 八と爲すに於て物に從ふに於て物に從ふ
 九と爲すに於て物に從ふに於て物に從ふ
 十と爲すに於て物に從ふに於て物に從ふ

あれい子午階のなまをいふまゝにいふ
てし終とさる一し去るハ連音と能階は何す
の式よりせし何すのはうおるをうあん能階
と能階の遠目とさる也此とく中七の能階より
各教の増減する事と和訓のほくききと▲杜熊
とらひ訓自語の牡丹と▲ぬうと物とよおるハ連音
ハ和訓の二あれと能階と音訓の二とるはるを

和漢のきらひあう音訓と一各せおる一此の
百約におる一物名の二もさん今此能階の世はより
論をいふ字の端此不核特とよ一しはとて今此
能階といふ古の各目とさむくをききい牡丹の
を物も或を踏皮のわんといふ或をわく餅とよ
時を折とさる一面と折りや又るしるしを一これ
と踏皮の牡丹とさるくと後ハ此のわぬりとさひ
餅の牡丹とあうくとおる越の膝くことさる能階
ハ例の治ちよりかして牡丹の牡丹とあうことと
又各と吳神とに古今の差子とさるらる也

器賤食服も目もきくら耳もひく抱らん情
 したをえある一なれいきとひ人の制をいさし
 我と用投とある一ま也指合とら倍法の拍子
 あれい子余波のつさありてあふん能階
 てし我とある一し去うへ連音と能階は
 の式うゆらせし何ゆのはらおるあふん能階
 と能階の遠近自とる也我とく中七の能階より
 各教の増減とる事と和訓のほくまきと杜能
 とらひ音語の牡丹とぬく物とふおるへ連音
 和訓の一あれも能階と音訓の二とるはるを

和漢のきういあう音訓と名せおる一此の
 百約におる物名の二も今能階の世はより
 論をいふ文の端此不接特と子一しとて今能
 能階といふ代の名目ととむくをきうい牡丹の
 在物も或は踏皮のわんとつひ或はわく餅とふ
 時を折ととる而をかりて又るしとるしとを
 と踏皮の牡丹ととるくと後七姓のわぬととい
 餅の牡丹とあうくとおと越の膝くととふ能階
 例の違ふよりかして括弧の牡丹とあつてとと
 ことと異姓とに古今の差子ととるんことと

柳只一▲櫻只一▲一て喜柳とい逢櫻とい
い或と秋冬の詞とむまひて之ある一と定
られと誰謂ま柳指とい柳鯛といひ替て例
の四一ゆり一され一き一い一を柳一逢一櫻一七二名
一辨の物あれい今此誰謂ま只一といむ柳一と
い柳一固一といふ是辨と例の教とらくま一て

香熱も食服も皆く一に例一ま一て▲一量只一
▲量只一四式一をかくの一とく一一一産一ると定一され一と
誰謂と例の青訓も及一と量一く一とある一一
とと何故一量一此一とある一や林量一一一てある一
と一の中一ち一ら一け一れ一の教一多一あれ一一色一く一よ一性
ととあ一て一一一下一通一の時一ふ一ん一量一と量一の教一ありと
中一心一より一な一ら一る一老一ありと一か一り一か一れ一ん一と一る一
とと一か一し一に一量一く一と一る一と一あ一ん一と一と一る一と一る一と一る一
とと秋一と一あ一る一と一量一く一と一る一ある一一一今一を一け
六一果一と一凡一例一と一て一古一今一の一た一ら一む一と一ま一り一と一む一る一也

ちりと申古の能事よひの火と掃ふらふの能事
 して神代は代なと字のさうちかかくと染草の
 ちとひより千式とひの万はといひ用ふこれおあれい
 捨るちもふあんおとちや古代の取捨といふと
 四式とと▲柳只二▲櫻只二して喜柳といひ蓮櫻と
 いひ或は秋冬の詞とむさひてとある一と空
 られと能事よひ柳掃といひ掃鯛といひ替て例
 の中より一とれとちとひを柳と蓮掃と二名
 一辨の物あれい今此能事よひ只一といふむ柳笑と
 つい柳固といふは辨と例の教をばくとちとれと

各熱も食服し皆くこころに例はまて▲管只二
 ▲管只二四式とかくのこく一産ると空とれ一と
 能事と例の青訓も及つと管くと二ある一
 とは何れよ管此二あるやか管と一とある
 とその中ちとけれぬ教多あれい一色くよと性
 一とあり一と下通の時ふんまを管の初ありと
 ちのふよりなるを老ありとある一とれいとも
 と二とちこに管とくと二あるとある一とちと
 と二と秋とありととと管くと二ある一と今とけ
 六果と凡例として古今のたふとちとれいも

うきまゝにふめつり凡次とてしるすにふりて
 ころり約とる白あつし人倫あつしとてしるすに
 中より人倫とてるまじきとて起居見守の詞
 とはげて人のふれをたぬき苦あれぬ父母とい
 △男女といひ目まじき耳まじらるるよまのふり或を
 自他のさうりころり或は法持のまじりと考へ
 打越の附んとおあつし人倫のまじりをいふ
 一むのころりをまじりあつしにまじらぬ古おはせ
 △い△誰△身△独△媒といふおをまじり人倫のまじり
 人倫とて定しとてこれよりは制の寛格と

おまじり一おしや古式の寛かゝるおは△誰何とい
 打越し人倫と嫌ふとて例のよまじりとて△僧は
 人倫にあつしとて例のよまじりとて一色くうま
 法をまじりてとて例のよまじりとて△僧の打越
 し人倫は去く△寺の打越しは不嫌へ一まじり
 △親王△皇女のことまじり△天皇とていひ△天女とい
 へし何の部に入てはまじり△帝も人倫とて
 去く△佛は不嫌ふとてはまじり△仙洞
 △新院のれと人倫と嫌ふとておまじり一いひ
 より此式も部れと定まらぬれ△佛と△鬼は

おとほくさむらひまゝにひの各とあけし一象に
百物とさし一と言とめて一萬語とせしとて余と
例におまゝとせしむらひや古式の據におのこに
大論より△月と文料と附るとまゝに△其方
と附るとまゝに△論と今この用とせしむ
△鏡とまゝに△詞と全く連音此用して我家
にけ詞とあしとれと流語の秋文より△女カメの
まゝに△大工の規矩と據よこれに△何れと
及ぶと或は△匠木と妻とまゝに△款ナケキと木
のつらひに△連音此用ありと△正ひと向ひ
と流語のコトナシヤク見

あんまゝと△篠と依之器と據よ此用は
一これと△おはなすの言と水也とまゝに△何れ
と折号と△さしと況や△山依と巨木と據よ
△さしとほひと字とさしと百世の人とあや
△さしと或は△詞とお分と△さしと△送と
△さしと△火とお分と△さしと△物と據よ
△さしと△海とさしとお分と據よこれと
△さしと論とさしと據よとさしとあんまゝ
△さしと大むらとお分とまゝに△さしと
△さしとあれと折号とさしとさしとさしと
△さしと

の指合と云々()と云け例と制法の境極と云ふ
命()と云や右式の嫌ひぬれと△冠と云ふ()と
はげ△綿と本棉とはげ△又云ふとせと嫌ひぬ
△ふと云と△雲に持とて論され()と
△とあれと云けぬと云ふ()附句と嫌ひぬれ
△今の能活と云く可用の何れあれとて()と
けぬおと云く可用の凡例と云ふ()と云を余へ
皆く挙るに及るとはれと云ふ()の何れと
△活と云ふ△所走と云ふと云ふ()と云ふ()と
附()打越と嫌ひぬと云ふ()の控と稱と()

但を証しと云く()と云()所と云()と云()と云()
右今の新敵と云連字と云()と云()と云()と云()
△只()と云連字と云()と云()と云()と云()
△と云()と云()と云()と云()と云()と云()
の人和と云つ()の折物()の馬の打越と云()と云()
半ありと云()の時を()と云()と云()と云()
連能の用と云()と云()と云()と云()と云()
△と云()と云()と云()と云()と云()と云()
と云()と云()と云()と云()と云()と云()
△所走と云()と云()と云()と云()と云()と云()

のきこしきしてかたりて世々の言とをいふし今選
 とるにむし世志嫌と人の見同とあるは地重
 くれと近くゆり一人の言語とあれぬおと軽けれ
 とも遠く嫌よきともいふ山とをいふて△山峰と
 一や二あり△凡とをいふの字法あれとも△山と
 一とありこれと世末の凡例とて連音此艶詞
 くと命もを△降とも△翻とも同よきをいふく
 物を只一と定しければの増減をいふれ今この
 世に能言と奉一知^{ケテヲ}万^ルとて敏捷の事と字を
 とれこれとの差子と軒敵あるたよ△山と

とをいふ△山と△林も△谷と△山と△谷
 とをいふ△山と△谷と△林も△谷と△山と
 △磯と△川と△浜と△山と△谷と△山と△谷と
 山と此志嫌の二十余字のちうひありて百世の
 海とひをけぬをさといふ山とをいふたれいと
 互初の能言二十とをいふとまうこれ乾坤時候
 より二座押遣用中て十二所の字類と一と字と
 あげて万字の例とあるは何のあつていふあるま
 やまう一と一知と一知と一知と一知と一知と
 ちうありけぬと連音と林とをいふと一と万

又千と字とを併して百代のいおとせしむとされ
 二世の象漢とかくのこしく一世の象漢と象漢
 しく百世の象漢とを併しむるも事意は同一合し
 去嫌し今の能指と論する時をよのほたの能と
 辨あるも言は却よと界とをよゆりふ能くたの辨の
 とかよわくふら一と本波のあらん田カセとある
 一能指をよ一と白土射の二世の作はと
 ちよこまを

○指合可有分別事

流傘と一能指とを併しむ可言指と能指とを併しむ可

可言おとる。建のひと指合するとしてなりけれ流傘
 よる。而の二字とあけててのうよは指合ありと
 されとさらしし例の故とあるとをよと偏ふ不味
 とよふとをよと和漢の訓美と論する建の字
 として一字二言あれは字中の詞として。の字に
 指合する而を為而の訓界あれは字二言
 として指合ある今もして可言のゆりのとある
 花とるんそと世中の字と語を花とるんといふ
 下。此界あると興而の二子としふとむむなり
 而字としての訓あると斯而の界あれは物

大和の詞^{テハト}とる者^{テハト}のとき、訓畧を抄^{テハト}しきと
 歌人と連音^{テハト}師も假名と真名とに通せられた
 不業の^{テハト}の^{テハト}おほ^{テハト}んけ詞を^{テハト}お^{テハト}れ^{テハト}余^{テハト}はとと
 ち^{テハト}ひ^{テハト}中^{テハト}の^{テハト}時^{テハト}の^{テハト}あ^{テハト}き^{テハト}用^{テハト}あ^{テハト}れ^{テハト}の^{テハト}法^{テハト}を^{テハト}と^{テハト}
 て^{テハト}かく^{テハト}の^{テハト}ま^{テハト}に^{テハト}指^{テハト}合^{テハト}の^{テハト}ま^{テハト}に^{テハト}軽^{テハト}れ^{テハト}の^{テハト}ま^{テハト}に^{テハト}
 の^{テハト}ま^{テハト}に^{テハト}は^{テハト}る^{テハト}を^{テハト}て^{テハト}お^{テハト}ら^{テハト}さ^{テハト}して^{テハト}ま^{テハト}に^{テハト}
 所^{テハト}合^{テハト}の^{テハト}作^{テハト}者^{テハト}の^{テハト}実^{テハト}名^{テハト}も^{テハト}あ^{テハト}ね^{テハト}の^{テハト}ま^{テハト}に^{テハト}連^{テハト}を^{テハト}
 支^{テハト}用^{テハト}して^{テハト}寛^{テハト}制^{テハト}の^{テハト}自^{テハト}在^{テハト}と^{テハト}ふ^{テハト}の^{テハト}ま^{テハト}に^{テハト}社^{テハト}を^{テハト}
 の^{テハト}ま^{テハト}に^{テハト}あ^{テハト}り^{テハト}て^{テハト}ま^{テハト}に^{テハト}あ^{テハト}り^{テハト}て^{テハト}ま^{テハト}に^{テハト}二^{テハト}句^{テハト}
 と^{テハト}言^{テハト}は^{テハト}れ^{テハト}の^{テハト}何^{テハト}な^{テハト}も^{テハト}や^{テハト}と^{テハト}分^{テハト}る^{テハト}ま^{テハト}に^{テハト}一^{テハト}〇^{テハト}比^{テハト}り

こと^{テハト}も^{テハト}連^{テハト}式^{テハト}と^{テハト}折^{テハト}と^{テハト}一^{テハト}所^{テハト}に^{テハト}流^{テハト}式^{テハト}と^{テハト}面^{テハト}と^{テハト}ら^{テハト}と
 婦^{テハト}も^{テハト}あ^{テハト}れ^{テハト}と^{テハト}ね^{テハト}と^{テハト}を^{テハト}耳^{テハト}と^{テハト}ま^{テハト}に^{テハト}詞^{テハト}を^{テハト}れ^{テハト}の^{テハト}能^{テハト}信^{テハト}
 の^{テハト}一^{テハト}所^{テハト}と^{テハト}折^{テハト}と^{テハト}を^{テハト}あ^{テハト}り^{テハト}て^{テハト}ま^{テハト}に^{テハト}二^{テハト}も
 ま^{テハト}に^{テハト}あ^{テハト}り^{テハト}て^{テハト}ま^{テハト}に^{テハト}あ^{テハト}り^{テハト}て^{テハト}ま^{テハト}に^{テハト}一^{テハト}〇^{テハト}比^{テハト}り
 十^{テハト}句^{テハト}と^{テハト}一^{テハト}〇^{テハト}と^{テハト}を^{テハト}あ^{テハト}り^{テハト}て^{テハト}ま^{テハト}に^{テハト}何^{テハト}の^{テハト}あ^{テハト}ら^{テハト}や^{テハト}け^{テハト}の
 の^{テハト}余^{テハト}遠^{テハト}波^{テハト}も^{テハト}と^{テハト}あ^{テハト}り^{テハト}て^{テハト}ま^{テハト}に^{テハト}あ^{テハト}り^{テハト}て^{テハト}ま^{テハト}に^{テハト}一^{テハト}〇^{テハト}比^{テハト}り
 の^{テハト}衆^{テハト}も^{テハト}あ^{テハト}り^{テハト}て^{テハト}ま^{テハト}に^{テハト}あ^{テハト}り^{テハト}て^{テハト}ま^{テハト}に^{テハト}一^{テハト}〇^{テハト}比^{テハト}り
 の^{テハト}ま^{テハト}に^{テハト}あ^{テハト}り^{テハト}て^{テハト}ま^{テハト}に^{テハト}あ^{テハト}り^{テハト}て^{テハト}ま^{テハト}に^{テハト}一^{テハト}〇^{テハト}比^{テハト}り
 と^{テハト}の^{テハト}詞^{テハト}は^{テハト}ら^{テハト}い^{テハト}あ^{テハト}れ^{テハト}と^{テハト}能^{テハト}信^{テハト}を^{テハト}信^{テハト}流^{テハト}平^{テハト}話^{テハト}と^{テハト}
 の^{テハト}ま^{テハト}に^{テハト}あ^{テハト}り^{テハト}て^{テハト}ま^{テハト}に^{テハト}あ^{テハト}り^{テハト}て^{テハト}ま^{テハト}に^{テハト}一^{テハト}〇^{テハト}比^{テハト}り

とをとり花お葉の二ふと。楓と花の面をけり
て軽く。楓とお葉を折と矯してちか何と
二ふの差ふあるやむと。其の艶とつひお葉
いふ秋の色とつひて楓と楓とを辨やむと
お葉をて用やむしむと。楓とあしと楓
とあしとらむと。楓と楓とを論ちむ
とや。論と楓と楓とを論ちむと。楓と
らりて只二ある。楓と楓とを論ちむと。
後のは。論と楓と。今選とらむに

の二條と指人を何のあむや。去嫌と何のあむ
や。一は。楓と楓と。二は。楓と楓と。三は。楓と楓と。
と。例のあむ。一は。楓と楓と。二は。楓と楓と。
の。一は。楓と楓と。二は。楓と楓と。三は。楓と楓と。

○千句有_二一物之_一事

おも連泥の在式より。鬼・虎・龍・女と。お
八千句と。一は。楓と楓と。二は。楓と楓と。三は。楓と楓と。
の。一は。楓と楓と。二は。楓と楓と。三は。楓と楓と。
へ能活の家。お常談と。一は。楓と楓と。二は。楓と楓と。三は。楓と楓と。

子らりて其の詞を以て連音の^豊詞とす
其の詞を以て連音の^豊詞とす
其の詞を以て連音の^豊詞とす
其の詞を以て連音の^豊詞とす
其の詞を以て連音の^豊詞とす
其の詞を以て連音の^豊詞とす
其の詞を以て連音の^豊詞とす
其の詞を以て連音の^豊詞とす
其の詞を以て連音の^豊詞とす
其の詞を以て連音の^豊詞とす

豊詞を以て連音の^豊詞とす
其の詞を以て連音の^豊詞とす
其の詞を以て連音の^豊詞とす
其の詞を以て連音の^豊詞とす
其の詞を以て連音の^豊詞とす
其の詞を以て連音の^豊詞とす
其の詞を以て連音の^豊詞とす
其の詞を以て連音の^豊詞とす
其の詞を以て連音の^豊詞とす
其の詞を以て連音の^豊詞とす

いづれの能潜る郡詞とめらむ誹者のたて集
の伊と交するところへ一海や公任種信信のとき
和漢通達の音の違はれ能潜の辨れありあは
いこれのよききくやとあや一はるる
我十條の返をそくもおそる一まゝか建内
のまじはれのれい和歌をうらひ連音とす能
能潜とあはさるるいれは不孤起起とす
大道の理よりそはの故さときふれを武の
新まさとまんとされはそを是とらんこれを
非といふもいそまなくいふ人の彼より我

とあはさるるも我ら彼とましくも我ら
爰も春秋の釘語ケウゴとおりの我とまらぬ
十條より我と罪とらぬものけし條ありん
福ふあはらぬ種の種よとされぬおのま前
い言とこいひて一きく再選の功とまらん
一世の議とまを今れ十條より一たの海と
まをけし一はあり

○花鳥有_二物_一之_事

旧式と竹木も然のれいお月むね只一りて音訓

よかりりて各々よふしてをてありてあれと
今の能諧の次は下ら論をい音よし訓もかろ
ましてても名とて中へにあつてて二あるは
花もある一きよに柳櫻のとききまを
柳のつらやうにさう秋を二季のおさうへに
むのそも落しおさう(まう)を様をまられと
冬かろけれらて中とて中しにも此二を
いよきやうに同し流のこまをま
常しよとておまの訓のさうにま
らに花と名と名と十月の名おとあ

まらんとてのさうにまらては水もも
ひまてて二季のおおへんされと今よ
つらまらて名とあげて一物二用の凡例と
あはれけのむもを付く一勸よも
まらにけをさよひ百もむとてを
おほしれよふれあふんもを二季の名目
おちしきよに二冬の花丹より冬様を
花を同名異種のおあれ今の二用のこ
二あるまらる理を論を二季の
まらひ同名し二と今と同名の

と二流は二あり一と云ふは今世をとおあはし
 してまをましてみ極といひ細極といひ極極の極ま
 と云ふとも決りて二をあり一と云ふも余の竹木も
 け削らるるもまをまらけ式の流まらるふへ柳を
 けよれともちるはとわかへ之様をおと流ふれと
 かつ時とよらぬ況や掌の盛衰より厚も
 無もまをまてまをまはもよのうらり親おふへ
 凡雅を削のまのこより悲喜哀乐のまをまを
 とをまらるへまをまをまをまら一削二用れる宛
 あれ二流は二と云ふと云ふ一と云ふ二と云ふの例と

ある一削二用は二季の例は及ぶ山吹とらり郭公
 ころよれを決りてけ論の筋れまらにけりあう
 二用の例ともて花咲といひ実をらるといひまを
 まをまをまらるといひてまをまをまを二用と云ふ
 四季の名目をかきりまをまをまをけ式の例と
 ころよれを削り凡雅の貴院より花をの二と云ふ
 月をまをまをまをまをまをまをまをまをまを
 削りまをまをまをまをまをまをまをまをまを
 ころよれをまをまをまをまをまをまをまをまを
 用をまをまをまをまをまをまをまをまをまを

論といはし一匹を今く新制表は古法に似たりと記
と破れともてはと破くさる古今の制語と之
つせさよりけ例のむさるとさくひて一匹の安祥
いふよ及びや一匹の安祥と定規ふく百世此
の安とはくまをかくのこくかくせとさくさく
あまの懸とさる也

○日用可^キ物^{ニス}事

右扱ふ○音○曉のおより○座○垣○袖○襟の
いさゝ○湯のけのしりふ字おとあを二二三

あれとも音を右今の字例とさくひ曉を
暮の字例とあらふ一例よさされ二と通の時
あまむあやゆ幸よの文も○はも訓美ととれ
おむつう一けれとさく折と念とてひ勢と
ひもある一むしを連能の或同と態^{ワカ}字よし
字さくばなあれと○注とひ○笑とひ○照雲
○植前の子とさく○露外と○起居も多用ある
中よも○目鼻○耳口のこさく後て○よの子も
○足のさしとくおく北平話あれは異流の例の
あつよ及びとてさく字とてさく字とてさく

おぼろげ態藝の字あふり、塵押復用の軽と詞
いさしとひ古式一にさしあし、折と替てを同し
さむく、この方の詞字に面と改て八と字を
七白とひみり、この方の字を論及
まして折と改と表と改、この方の字を論及
まも、今選をるに、折と改、この方の字を論及
わ、世界、あ、この詞字の軽とを我とを
一、これ、この方の折と改、この方の字を論及
とさ、この方の字を論及、この方の字を論及
の字類と凡例と改、この方の字を論及

○ 不可不審^キ控^ス之事

おぼろげ中、この式目と論、この方の字を論及
用、この方の字を論及、この方の字を論及
あ、この方の字を論及、この方の字を論及
滑、この方の字を論及、この方の字を論及
改、この方の字を論及、この方の字を論及
不、この方の字を論及、この方の字を論及
と、この方の字を論及、この方の字を論及

何處あつたといふ字ともいふ述懐とあり親子
にほきくを述懐あるよりこれくを所ぬ
殆どぬ一或は福壽電光と天象は嫌うとい
ひ鳥鵲の橋と生れあつたといふ我と生れ
嫌うといふ民の電と生れあつたといふ
例の不用やねを亦やけおらる命を推量
しうといふ船をいふとまゝにうゑるといふ
不審の事といふ用といふや他を今式の人を
いふやおれの中より借馬糸のほけを秋能滑の
り用あつた論まゝ不審はくなくといふ

いふ事といふ御況とまゝに一柱おあつたや
其況と秋といふもいふれといふあつた冬あり
櫻人況といふまゝの事と柱を柱おといふ
人倫といふはりといふ一柱の家お況といふ色
ちいある時をまゝといふとあつたありと道
とい貫の日ありん或は洞の事を浮おとい
洞の雨を浮おといふとといふは命のお秋も
不審あつたといふのねあり調をこゝて我家
の用あつたといふ論をいふといふ及いふといふ
といふと秋といふといふおをいふに妻情のまゝ

あんまの字とさるるを秋北の字とあるを根が
 下おまの所らるるをやまらるるをの根の下と認め
 りの根をさるるをいひてま根もおまといふ
 なるはまのめらるるありてこれと不審の
 不審
 といひて但をとおと看破して不埒不ぬの認
 とやいふ或と根とを雜と認めと標するを
 勿論とて言はれしにまつてもま実とてのちる
 名あんと論あふ秋字といふ一或は成傘
 記の日は論を世言おま冬とてこれと記巴
 下向して奥候とまらねりてその際とての弟子

一難破といふ記の記といふ字と連なりといふ面を
 まゝの飛階といふ折と婦事といふ何故といふ一字の
 連なりといふしく厳重なるやされと飛階は
 平話といふれこの名れとといひしねい冬と雜
 う北論といふ及んて勢してけの畢竟の不審
 へ不審の候よりして左おの控よりとて人まや
 但を老人述懐とありて根を秋字ありと
 左おの控とてくまや一社の家録といふ北
 家議といふ所の用といふま色返るるは其の
 子と儒佛神のの家より今の公儀のけなを

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Chinese calligraphy, arranged in approximately 10 horizontal lines within a rectangular border.

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Chinese calligraphy, arranged in approximately 10 horizontal lines within a rectangular border.

ざし訓と一きまひなま文の識伴達とて叱
 まうりもむりや動りともさしこり美ありとて
 我々の馬もさかへもあやまりも致ふいなるせ
 物して今のはらもくあらち和の平話も同雅を
 正鵠と及ふさんけなふけ修を雲海も城も
 陣ともりて馬も一後ひともさきさきとて
 古抄と新古老と敵とて平竟も今能清
 一耳字文の害らんととねとせはらや由余れ
 鳩の下よ。鳩をさしたるせあゆの馬と字も

ぶせけんしんらーつぎとつひてふちの馬と
 ぶまるとあ一人とわらうとをけおせぬ
 中少の馬と大馬とをけおせぬ
 のあふ池水のこく湖水のまぬらうと形容
 ありと山崎を伝のドとれうらやおぬゆき
 各蹊シヤフつれ或と○流字の在牙撃と流のま
 り字の誤あり曝布の子子とち一とと例の
 子彌シヤフあり但や曝字を老人の誤と曝を
 飛泉懸心水とあり付て子と曝布サラスと訓て
 流と伝くる人の形容より流のうらと美訓

吉柳

三

あんに大和にけられとりのむしとてしるくし片假名
 と付しまやらふまじし誨とあしむむしとてしるくし一牧
 と埒のあしむと馬と馬と訓らるるも今この用
 と達とてしるくし佛家と書数のその向とてしるくし
 能活と人知のあしむとや或とて。詠の字に
 新文とてしるくし月とてしるくし同訓異の字に於て
 ぶくれの式同の例の中とてしるくしあしむとてしるくし和歌に
 連字とてしるくしの訓も分るあしむとてしるくし詠とてしるくし
 吟詠とてしるくし詠言とてしるくし詠也とてしるくし詠の字に
 古今の字にて詠嘆とてしるくし詞とてしるくし感嘆

しるくし物とてしるくしあしむとてしるくし佛家のれ誨と
 節とてしるくししるくしの詠吟とてしるくし詠也とてしるくし
 同訓異字とてしるくしを同しあしむとてしるくし物字とてしるくし
 字とてしるくししるくし詠字とてしるくし一物とてしるくし
 流視の字訓ありて本物の古訓とてしるくし物とてしるくし
 詩とてしるくし物字とてしるくし訓とてしるくし也とてしるくし物花とてしるくし
 詠花とてしるくし西並ふれしるくしの副假名とてしるくし
 字とてしるくし詠文の美とてしるくし字とてしるくし詠文の略
 して物とてしるくし流視の略ありて右とてしるくしおとてしるくし
 ありとてしるくし詠文の美とてしるくし詠文の略ありて

一假名と真名とに通をたれぬ家通の字
 ちりひより箸柄といひる^{アヌク}同訓の
 穿鑿をきよふ一とてしめて年論のその中より
 〇^人齡とふ字此穿鑿をたれ傘一部の長文と
 建治應安の両式とて一日を固の字近連と
 筆く^{カスガ}落すとて又辨とての^ニ微細の辨^ハ均^ハあ
 り^ニ一^ハ字論を例の世用
 あり^{スナ}筆^ハに^ハ又の優游とてふ一^ハ人^ハ率^ハ曰^ハ齡
 の^ハ之^ハそ^ハら^ハに^ハそ^ハち^ハ等^ハよ^ハ年^ハの^ハ字^ハ但^ハ教^ハの^ハ七^ハ十^ハ八^ハ十^ハと
 不可^{スト}嫌^ラく^ラこれ新式のお越と嫌ふおのふよ

ありそれ新式を惜学此各近連のおほくあ合
 下^ハ年^ハひ^ハく^ハ穿^ハ鑿^ハを^ハた^ハれ^ハ今^ハの^ハ力^ハと^ハも^ハり^ハて
 け^ハお^ハあ^ハく^ハ一^ハ骨^ハお^ハと^ハち^ハあ^ハく^ハと^ハお^ハあり^ハと^ハ一^ハ派
 一^ハ感^ハ潘^ハと^ハあ^ハく^ハ付^ハら^ハた^ハれ^ハと^ハけ^ハ一^ハ條^ハを^ハ龍^ハの
 是^ハま^ハは^ハま^ハく^ハと^ハや^ハら^ハむ^ハ又^ハら^ハる^ハる^ハの^ハ及^ハら^ハる^ハよ^ハや
 又^ハよ^ハ合^ハと^ハあ^ハく^ハ一^ハと^ハそ^ハら^ハに^ハと^ハら^ハと^ハふ^ハよ^ハ年^ハ字
 と^ハ二^ハの^ハも^ハく^ハひ^ハと^ハそ^ハら^ハと^ハう^ハあ^ハ付^ハを^ハ不可^{スト}嫌^ラく^ラ
 一^ハり^ハち^ハの^ハ字^ハよ^ハ年^ハの^ハ又^ハ字^ハあ^ハる^ハと^ハい^ハら^ハく^ハあ^ハる^ハく
 年^ハ稔^ハ歳^ハ禾^ハ一^ハと^ハれ^ハく^ハの^ハと^ハせ^ハ字^ハよ^ハち^ハの^ハあ^ハり
 お^ハろ^ハく^ハを^ハ古^ハ人^ハの^ハ誤^ハる^ハ一^ハと^ハい^ハふ^ハ今^ハを^ハ新^ハ式^ハの

ミウシヨウシ
二十一年四十年より十年の子と云ふはあつておのほ
七十八十の嫌まきと答ふりつと御はみよおる
せあるとちこ。これ假名はひつとこ。とち
といひおあよとやそちとを老人の自作自速
あんとおと決りて十年の二字ありん筆の連音
の懐帯あよに四十字を又中をあつとふと四十字
又十年とちあひひつと何んあつ人の輩の対し
よちちいとちとふ時と年の子とちの御はみよ
て年の子とちあつて解きつとふはあつ人の
齡の四十字とよちちとちとちとちとちとふ時とふ子の

字ありきと人の四十八あると米年といふ
うと一四八ある人と四十字の子とあつて又十ある
人を又十の子とあつとふ人もあつた。此を
とちまよとちおつとあよちの字とち
あちまなりと云ふは答よけに又辨よ言と言
あつて時のおよとちかきまらあつてあつて
とちちと一四の早きと二十字四十字とちま
いまあるあつて米字とふ時と四十八あるとあつ
て八十八字の子とふとやとちの和よとちま
あつてとちと解きつとちとちとちとちとちと

又らの字よりなるき一と云ふ今迄言ふは此の用を
 新式の年の字と持ては筆の字をせよと用は
 ありされし新式の年の字と違ひて今迄言ふ
 とせむと云ふは筆の字をせよと云ふにせられ
 てよと云ふの指令も申念あつたなりと能清と
 ハ類類ツラカウと云ひて申用の傍語よりよとせられけ
 以下を丸くしと例は古凡の早下自慢也今選
 まりた難各の字を竟をこそあらんと二十年此訓
 異各うして禪師セシと云ひは師と云ふ撥字ハコシと云ふ
 と云ふあれ障子セウジと云ふ菓子と云ひ和訓を

これの俗語ありて多と大和の神祕として
 せしむる若なる神の事ありと云ふ漢字の自慢は
 傍語とせむと云ふは次をこれに論の傍る不
 法筆の字は十ツシ字と云ふも新式めりし十ツシ年
 あれ、整の之十ツシ年ヨウシ四ヨウシ年ヨウシの字と婦の字
 あり物の表也七ナナ十八ヤウの字の字の婦の字と
 と新式の訂章と云ふと云ふ一かくの字と云ふ
 ことと云ふ例は若の傍記ありしと云ふもこれに
 けらと云ふと云ふはけらと云ふ能清と云ふと云ふ
 能清と云ふと云ふはけらと云ふ能清と云ふと云ふ

詠美し比喩きし詠美の遊しして世はよ人知の
用あれはくみまの能借をきるるなり

○家々の秘傳の事

むしりし和歌し連歌し家々の秘傳あり
折言緋血刺の所法よおよし中比の能借しおまけ
和歌し連歌よほしおまけと秘傳を仲れと
今此能借しつりしをたし入るしきりし事詠
とせよのし候よしおまけの能借の秘傳あり
とくきぬしあやまきる月と二夜よきりしひて

実の心をぬきおしや山争の不均と海はあされ
秋されの秋よしそしはの詞しちあし
きし春あれは秋あれはくわぬし歌を此は連
しちとくわしや藝よ歌者の夜をほしはひたひ
ま実の美をあらうとぬけ色ととりしひあふ
さうちの夜を皆く囃とちをけし信し
しよし他し春あれは秋あれは実しあふは
と中今今よまきされし秋されし連歌なり此
用あれはは夜よまきよあはねと文はりしひお
はりしつりし能借の日用ちるしり傳語の訓美

と海より一去とて杵の果とけり文とてなるべし
とりのおまじとて思ふことけりなはし詞とて思ふ
夕部はゆつりていつておと目よりなれ果とて
いふ言されしおされしとて思ふ言とて思ふ
とて思ふ下或る方果此果文とけり。此子の所
傳の秘とて思ふこと書けし思ふ人あること
とて思ふ自證とて思ふこと思ふ所傳と
いふこと思ふこと思ふこと思ふこと思ふこと
百世の人とて思ふこと思ふこと思ふこと思ふこと
とて思ふ我の思ふこと思ふこと思ふこと思ふこと

秘とて思ふこと思ふこと思ふこと思ふこと思ふこと
の曲とて思ふこと思ふこと思ふこと思ふこと思ふこと
埒のあけし思ふこと思ふこと思ふこと思ふこと思ふこと
用事とて思ふこと思ふこと思ふこと思ふこと思ふこと
鳥類とて思ふこと思ふこと思ふこと思ふこと思ふこと
とて思ふの秘とて思ふこと思ふこと思ふこと思ふこと思ふこと
とて思ふこと思ふこと思ふこと思ふこと思ふこと思ふこと
とて思ふこと思ふこと思ふこと思ふこと思ふこと思ふこと
とて思ふこと思ふこと思ふこと思ふこと思ふこと思ふこと
とて思ふこと思ふこと思ふこと思ふこと思ふこと思ふこと
とて思ふこと思ふこと思ふこと思ふこと思ふこと思ふこと

此年のおそろいとははらへ朝あつげのねえと新式
 と非お分ふと載せられけり既にあのみふあつ伺い
 何の疑あつてう二条殿の所老老あつてやを
 お月つらあしちけを伺のみまこへこつホセ又言
 お通あつてそり今うふと新式のまことと申すれ
 凡例としまらうらおとつちを時合しつておとつおと
 つよのお分あつてりちられせくの連年時つゆのれと
 まらうと時合つていおとつちとお分つてい新式の例
 とあつてつむうと新式とらむ世の或とつんてつおとら
 烏とつれともおちけと非お分とつ不務此

時並ときふとつむまも詞とあらつて老老と
 も世と二条家のつれもなにかとあね不覺の
 放言しつて新式一部を老老の所はあつてや
 實におそろいまの我つと十條もあつてくの非と
 あられいんもく我非とつちめはらんや二世の衆議
 とおらるるまもそをせられ字よしなと身集れ
 とらつて天下の時うめき傳授あつていふおを
 とも各同とつあがりも穠葉の下つていおれ
 一うはつていおれ又言し柱木の穠との内せける
 の名れはら字を穠の字よしあつて右のそく

いふあくは筆一部の放言にてとも序よつて
花咲の神を重し今を疑ふ（て）式目となれり
物にてとも我は秘すの法を或をぬる或は
あまらう我はきつねし（て）あつり一世のねは
中用とさつらるへ言はる所の法とす（て）せ
わくのそとくかくのそとまを（て）あつり（て）言は
之四者そにげらと家とす（て）

おろくろの秘授秘傳とす（て）あつり（て）家く（て）

是等の口とけをもつてなほのち前よりゆつたは
 まうとあれし我々も能潜も古人あつて
 千系一斬の秘訓ありて百世も天下の古託と
 坐断されし今此十條を考に却のつていふて
 論もるも故託の耳とるるも能くははるる知
 天道の恢ニキニふし能潜のるともて儒氏のま子
 此詞よりを拜見して六藝の媒とをさるる儒家
 と史記の神とあるとやまされ能潜と能潜と
 い各ふの家あれし此竹の武目といふすまて
 あつたし貞享此とつりえ禄のちちまてし

カキ

系家と能く能潜の名とほく入て世又世の門と
 叩くてし書けおと武目とをるに今此武路の
 宗匠家ゆりにおとて今余おとあつた
 とめく長政老人の法余とめく能潜フシとをれ
 い能潜も能潜もおと一ゆはとあるとてさる
 我々の古老とては学技のきく此通をさるし
 おもしとてものなほの遺誠はうらと十余年
 とてさるる能潜の辭をほくかてくことと
 といふ論とさるる古風の附方とほくさ
 とぬるを例の二とてはくちをてはれの遺誠

と識シ文ととをあらりまよイナシクおろし我まもイナシク驍シ竜
 額下オトカイせえとわきてては海よと世とひらきむ
 そと一人の大任あつてもやららう今シの能シ諧
 の我シくまらりて我とおそろしむるを儒シ御シを家
 世シまよと家一は歌連シのシ花シ弱シとめむ
 とたれつとめつと過シ書シのシ福シはのりてた子
 酒シ屋シのシ凡シ俗シよシ少シしシ高シ遠シ塵シ誕シのシ海シ名
 手シあシよシとシむシとシまシとシぬシのシのシちシらシふシ
 してまら一人のほくまむふあり我シくまらて
 ともつとまらと能シ諧シするのさ世シて我シく

まらてまよおとまよまらと世はよ又倫の人知ち也
 せれと儒御の内秘とも能シ諧シのお理ともらよ
 あれつと字者てた遺命と疑つと古とせきて
 今とせむまむとよ一乃兩断のけ諾と看破て
 け十條の結文とまら秘シと秘シとシまらとちと
 一語あらる一



十箇條月之口終

